

道真の詩に投影された『白氏文集』

— 道真の『白氏文集』からの摂取態度の一考察 —

焼山廣志

つとにその影響関係の指摘されている白楽天の詩について、
 先学に導びかれつつ道真が白詩をどう消化、吸収し、どう自らの
 創作に生かしていったかについて試論を展開してみたい。

『白氏文集』と道真の詩とのかかわりを論ぜられたものに金子彦二郎氏の著述（注①）があるが、いま「白氏文集に関係ある平安時代の句題、詩題に関する研究調査表」（注②）によりつつ以下の論にかかわるものを抜き出し、これを個別に検討したものが、次表である。

『白氏文集』	作品番号	『菅家文章・菅家後集』	作品番号
白牡丹	〇〇三一	法花寺白牡丹	二五七
聞早鶯	〇二九五	聽早鶯	八三
官舎問題	〇九二〇	官舎幽趣	五〇四
廳前桂	〇九五四	訓藤司馬詠序前桜花之作上	二八六

山居	〇九八三	賦雨夜紗燈	應製并序	三八〇
尋郭道士不遇	一〇一九	尋師不遇		三二二
春江	一一五九	詩友会飲	同賦鶯声誘引	四三三
不睡	一三〇七	来花下		三〇八
杭州春望	一三六四	晴砂		一七〇
一葉落	二一九八	一葉落		二九七
就花枝	二二三二	就花枝	應製	三四一
和微之詩 (和雨中花)	二二六八	早春、侍内宴、同賦		八五
河亭晴望九月八日	二四九五	雨中花 應製		
花酒	二六〇五	重陽後朝同賦秋雁櫓声		三四九
		来 應製		
		九日侍宴、同賦吹華酒		七一
		應製		

南園試小楽	二六五〇	南園試小楽	一七七
和春深二十首	二六五三	寒早十首	二〇〇
	二六七二		二〇九
不出門	二七四九	不出門	四七八
對鏡	二七五五	對鏡	二五四
北窓三友	二九八五	讀楽天北窓三友詩	四七七
灘聲	三五七二	灘聲	一六一

(注) 作品番号については『白氏文集』は『白氏文集の批判的研究』花房英樹著の「2総合作品表」の分類番号により、『菅家文章、菅家後集』の作品番号は、岩波古典大系本の通し番号に従った。以下同じ。

『白氏文集』の道真の詩への影響を考える場合、その影響の度合によって次のような分類を試みた。

甲、「狭義的影響」：詩題、詩句、詩語、詩形態に表面的な影響が見られるもの。

乙、「広義的影響」：狭義的影響のみに留まらず内容にわたって深い影響のみられるもの。

対象とした作品を右の分類に充てはめると次のようになる。

分類	『菅家文章、菅家後集』 (作品番号、巻)	『白氏文集』 (作品番号、巻)
甲	賦雨夜紗燈 應製 (三八〇、巻五)	山居 (九八三、巻一六)

道真の詩に投影された『白氏文集』

乙	甲
詩友會飲同賦鶯聲誘引來花 下 (四三三、巻六)	春江
就花枝 應製 (三四一、巻五)	就花枝 (二二三二、巻二一)
重陽後朝同賦秋雁櫓聲來 應製 (三四九、巻五)	河亭晴望 (二四九五、巻二四)
寒早十首 (二〇〇、二〇九、巻三)	和春深二十首 (二六五三、 二六七二、巻二六)
不出門 (四七八、後集)	不出門 (二七四九、巻二七)
灘聲 (一六一、巻二)	灘聲 (三五七二、巻三六)
法花寺白牡丹 (二五七、巻四)	白牡丹 (三二一、巻一)
尋師不遇 (三二二、巻四)	尋郭道士不遇 (二〇一九、巻二七)
不睡 (三〇八、巻四)	不睡 (二三〇七、巻一九)
一葉落 (二九七、巻四)	一葉落 (二一九八、巻二二)
南園試小楽 (二七七、巻二)	南国試小楽 (二六五〇、巻二六)
讀楽天北窓三友詩 (四七七、後集)	北窓三友 (二九八五、巻二九)

(注) 金子彦二郎氏が影響関係を指摘されているものでも、それを明確化できず不審が残るものは、除外した。

二

〔甲、狹義的影響〕をさらに具体的に述べてみたい。

一、詩形態の類似性

和春深二十首	寒早十首
何處春深好	何人寒氣早
春深富貴家	寒早走還人
馬為中路鳥	案戸無新口
妓作後庭花	尋名占舊身
羅綺驅論隊	地毛鄉土瘠
金銀用短車 ¹	天骨去來貧
眼前何所苦	不以慈悲繫
唯苦日西斜	浮逃定可頻

(『白氏文集』二六五三卷二六) (『菅家文章』二〇〇卷三)

道真の詩は十首であり、白楽天の詩は二十首ではあるが、その毎詩に韻字として「人、身、貧、頻」の四字を使用しているあたりは白詩の毎詩に「家、花、車、斜」の四字を使用した五言律詩と、全くその形態を同じくしている事から、道真が白詩に模して創作したであろう事は明かである。

又道真の十詩全て、第一句は「何人寒氣早」となっており、白詩二十首全ての第一句「何處春深好」の句作りを意識して形

態のみを模して創作したものと思われる。(注③)
二、字句の類似性

白楽天の詩句 夜伴只紗燈。	山居 (九八三)	紗燈一點五更迴	『菅家文章、 菅家後集』の 詩題と作品番号
鶯聲誘引來花下。	春江 (二五九)	同賦鶯聲誘引來 花下。	賦鶯聲誘引來 詩友會飲、同 賦鶯聲誘引來 花下(四三三)
就花枝移酒海	就花枝 (二二二)	便就花枝不眠	就花枝應製 (三四一)
護江提白晴沙。	杭州春望 (二二六四)	晴砂宜勝境	晴砂 (二七〇)
秋雁檣聲來。	河亭晴望 (二四九五)	碧紗窓下檣聲幽 聞說蕭旅雁秋	重陽後朝同賦 秋雁檣聲來應 製(三四九)
清流決決響冷冷 玉管朱弦可要聽	灘聲 (三五七二)	唯愛水潺潺 如彈古調弦	灘聲 (二六一)

(注) 各々対応している印(○、×)は、両詩の字句の類似を示している。

次に〔乙、広義的影響〕について、白詩の「白牡丹」と道真

の詩「法花寺白牡丹」、白詩の「南園試小楽」と道真の詩「南園試小楽」の二例をとって以下に詳述してみる。

白牡丹 和錢學士作

城中看花客
且暮走營營
素華人_レ不顧
亦占牡丹名
開在深寺中
車馬無來聲
唯有錢學士
盡日遶叢行
憐此皓然質
無人自芳馨
衆嫌我獨賞
移植在中庭
留景夜不暝
迎光曙先明
對之心亦靜
虛白相向生
唐昌玉蘂花
攀翫衆所爭
折來比顔色

法花寺白牡丹

色即為貞白
名猶喚牡丹
嫌隨凡草種
好向法華看
在地輕雲縮
非時小雪寒
繞叢作何念
清淨寫心肝

(『菅家文章』二五七卷四)

道真の詩に投影された『白氏文集』

一種如瑤瓊
彼因稀見貴
此以多為輕
始知無正色
愛惡隨人情
豈惟花獨爾
理与人事并
君看入眼著
紫艷与紅英

(注④)

(『白氏文集』〇〇三一卷二)

城中花を看る客
且暮走りて營營たり
素華人顧みざれども
亦牡丹の名を占む
開きて深寺の中に在れども
車馬來る聲無し
唯 錢學士のみ有り
盡日叢を遶りて行く
憐む此の皓然の質
人無きにして自ら芳馨なり
衆は嫌へども我獨り賞し
移し植ゑて中庭に在り
景を留めて夜暝からず

色はすなはち貞白たり

名は猶ほ牡丹と喚ぶ

凡草に隨ひて種ゑられむことを嫌ふ

法華と好向して看る

地に在りては輕雲縮る

時非ずして小雪寒いたり

叢を繞りて何の念ひをかなす

清淨なるに心肝を寫かむ

光を迎へて曙あけぼの先明かなり

之に對すれば心も亦靜かに

虚白相向ひて生ず

唐昌玉蕊花きよくすくわ

衆の争ふ所を攀翫して

折り來りて顔色を比ふれば

一種瑤瓊ようじゆうの如し

彼は稀なるに因り貴ばれ

此は多きを以て軽んぜらる

始めて知る 正色無きことを

愛悪は人情に随ふことを

豈惟だ花のみ獨り爾しからんや

理は人事なまと并ぶ

君看よ眼に入るは

紫艷と紅英と

この二詩は、既に、川口久雄氏によって指摘されている所

(注⑤)だが、白詩の第三四句「素華人不顧 亦占牡丹名」を踏まえて道真が一、二句で「色即為貞白 名猶喚牡丹」の句作りをしていることは明らかである。その他、字句の類似を調べると一線で前に示したように道真の詩には白詩のかなりの影響が見られる。

さらに全詩を通して内容を比較してみた場合、又新たな事柄

が浮かび上がってくる。

まずこの白詩の「白牡丹」では、「白牡丹が当代の人々の目から退けられ陰の存在となつてゐる。こうした事は人間の持つ身勝手さからくるもので、それは単に花に限つた事ではなく、人事においてもしかりである」という、憤懣の気持ちを讀み取る事ができる。詩の「始知無正色、愛悪随人情、豈惟花獨爾、理與人事并」の部分にテーマがあると思う。

ここで注意しておかなければならないのは、白詩では「白牡丹」そのものに重点が置かれてゐるのではなく、この花を取り上げることによって「玉蕊花」との比較を通して自らのテーマを表現しようとしている点である。

しかし、一方、道真の詩は「白牡丹」に対する作者の受け止め方が明確に打ち出されてゐる。つまり、「白牡丹」そのものが道真にとって鑑賞に耐え得る愛すべき花として展開されてゐるのである。一、二句目の「嫌随凡草種、好向法華看」の部分、さらに七、八句目で「繞叢作何念、清淨寫心肝」と締め括つてゐる。道真は「牡丹」を仏教でいう「蓮の花」と同じ位の「貴く有難き花」とみなしてゐるのである。

白詩では「白」であるが故に人々に疎んじられてゐると表現してゐるのに対して、道真の場合は「在地輕雲縮、非時小雪寒」といった比喩を試みて「白」という色を白詩とは違つた「白ゆえに」良しとする態度でこの花に接してゐると考えられる。

とすれば、一見、白居易のこの詩を道真は素材として摂取し

白詩とは異質のテーマで創作を試みたかのように思えるが、さらに両詩の内容を吟味すると、そうでない事が明らかになってくる。

そのことを論証するにはどうしても道真のこの詩の詠作年代にかかわらなくてはならない。

この詩が詠まれたのは、川口久雄の考証(注⑥)によれば、仁和四年春で、その年は讃岐守として赴任二年目にあたり、又同年六月、橘広相の阿衡問題紛糾が起こっている。

この事件に対し道真が並々ならぬ関心を寄せていた事は、例えば「(仁和四年)奉昭宣公(基経)書。菅丞相讃州刺史時」を見ても十分察知がつく。

この阿衡事件に関しての研究は坂本太郎氏他の論文(注⑦)に詳しいが、この事件の真意を端的に述べられているものとして秋山氏の論文がある。(注⑧)それによれば、

阿衡事件のような紛争は、(中略)基経の天皇への示威であり、朝政のおそれを措いては運営することができないこと、詔勅すら左右しうることを誇示するものである、と同時に皇室と橘氏とを割いてこれが抬頭を制圧しようとするものであっただろう。(中略)学儒の世界は事大的な保身と分争を事とするよりはかかない泥沼のような状況を呈していたのであった。

とある。

つまり、このような事態は、道真のような学儒たらんとする

者にとっては大きな衝撃として、あるいは危機感として切実に受けとめられていたはずである。

ただ、この詩は讃岐赴任中に詠まれたものだけに、京都で生じたこの事件に、直接関与していただとは思われないが、このような事件は、突如として生じたものではなく、この事件の生じる風潮はかなり以前から萌芽していたものと考えられる。弥永氏は道真の讃岐赴任について次のように述べておられる。(注⑨)

一方に摂政基経があり、他方に橘広相の進出がかなりめだってきた、というのが仁和年間の政治権力の底流をなしていたのである。こういった情勢の変化が道真の讃岐守任命に何らかの作用をしているのかもしれないが、やはり文人同志の反目の方がより大きな力を以てはたらいているのではないか。こういった時流を道真は赴任当初よりいち早く感じとっていたであろう。さらにこの阿衡事件が生じたのが、讃岐赴任中だとは言え、実は、暇を乞うて前年の仁和三年末より京都の自邸で越年しているのである。つまり、阿衡事件の生じるような京の政治動向を、その時我が身で感じ取っていたと思われる。

(注⑨)

それ故、単なる傍観者にはなりえず、『菅家文章』巻三、四の詩群にみられる道真のこの讃岐赴任に対するある種の割り切れぬ心情が、この阿衡事件によって触発され、悲憤に近いものへ追いやられていったのではあるまいか。

このような状況を踏まえて改めて「法花寺白牡丹」を考えて

みなくてはならないと思う。

そこで本題に戻るが、この詩を白詩の「白牡丹」と照らし合わせた時、先に述べたような道真の心情が明らかに becoming ようになってくるように思う。

白居易の投げ掛けた「本来の美しさが理解されずに人の身勝手さで好悪が決められてしまう」憐むべき白牡丹は、道真自身あるいは真の学儒たらんとする人間達の状況のそれとして把握されていたに違いない。とすれば道真にとって白詩のテーマである「白牡丹の陰の存在に対する不満」の投げ掛けでは飽き足らなかつたと思われる。今の彼の心境を表わすためには、陰の存在を否定した「美しくすばらしい花」として白牡丹を評価する方向で創作が行われなければならなかつたのは必然的な結果と思える。それ故道真の詩には白詩より、より強い「白牡丹賛美」の態度が明確になってくる。

このように見て行けば三句の「嫌随凡草種」は、道真の自己正当化と今の事態へ追い込んだ人々に対する強裂な批判を含んでいると思う。

つまり「凡草」、それは政界において媚びをうる立身出世志向の小人達、さらには阿衡事件で見られるような無難な生き方を望む京の文人達を喻え、「それらの人々と交わる事なく自分の立場こそは、白牡丹の色の如く潔癖であり、その生き方を全うしよう」と願っている。今こうして疎んじられた身であるが、必ずやその正当性が世に認められる時が来る」気持ちを含めた強

い真の学儒たらんとするプライドの中に生きる道真の姿勢がこの句には表現されているのではあるまいか。

以上、論述してきたようにこの道真の詩は白詩のテーマを正確に踏まえた上での創作であつたわけで、この白詩との関係を見過してはこの道真の詩は十分に理解できないと考える。

南園試小楽

小園斑駁花初発

南園試小楽
遇境偷閑喚管弦

新楽錚鏦教欲成

餘霞断處落花前

紅萼紫房皆手植

小兒相勸分頭舞

蒼頭碧玉盡家生

取楽當為地上仙

高調管色吹銀字

(『菅家文草』一七七卷二)

慢拽歌詞唱渭城

不飲一杯聽一曲

將何安慰老心情

(『白氏文集』二六五〇卷二六)

小園斑駁にして花初めて発く

境に遇ひ閑を偷みて管弦を喚ぶ

新楽錚鏦として教へ成りなん

餘霞断ゆる處落花の前

と欲す

小兒相勸む分頭の舞ひを

紅萼紫房は皆手づから植ゑたり

楽を取りて地上の仙となるべし

蒼頭碧玉の家を盡して生れり

高く管色を調べて銀字を吹く
慢く歌詞を拽きて渭城に唱ふ
一杯を飲みて一曲を聴かずんば
何を得て老心情を安慰せん

まず道真の詩の詠作事情を考察してみなくてはならない。

「右親衛平将軍、率_レ庶亭諸僕、奉_レ賀相國五十年。宴座後屏風圖詩五首」の中の一首が、ここでとりあげる「南園試小楽」である。この屏風圖詩五首には序がありその注に「將軍許余以言笑之好、元年冬杪密語云、相國今年滿五十予率諸僕可設遊宴、座後所施屏風、欲致妙絶汝作詩、藤將軍書之、巨金岡画之、予願足矣。再三雖辭、遂不寬放。此序是呂氏春秋之成文也。為叙本意乃有此注而已。」とある。

つまり、基経の五十歳の賀宴を平将軍が設け、その折贈答として屏風画を巨勢金岡が描き、題画詩を道真が、書写を藤将軍が担当することになり準備を進めた事実がわかる。

川口氏によればこの「右親衛平将軍」は右近衛中将平正範、「相国」は太政大臣藤原基経、「藤將軍」は名筆藤原敏行であろうとされる。(注⑪)

ここで、二詩の比較に戻る。川口氏は白詩とのかかわりについて「文集に『南園試小楽』という同題の七律がある。その影響があつて老人の心情を安慰する気持ちもある」(注⑫)と指摘をされているが、以下その影響関係を一句毎に考察してみた

道真の詩に投影された『白氏文集』

い。

第一句で、道真が「閑を偷みて管弦を喚ぶ」といった句作りをしたのは、白詩の第五、六句「高く管色を調べて銀字を吹く、慢く歌詞を拽きて渭城に唱ふ」から察する事が出来るように、白楽天自らが演奏者であり鑑賞者であるような音楽との接し方に対し、道真は、基経が今、政界の最高権力者である太政大臣であるという事を考慮した音楽の鑑賞法を想定しての事であつたと見るべきであろう。それは、「喚管弦」で明らかに指摘し得る。

次いで第二句「餘霞断ゆる處、落花の前」では、白詩の「小園斑駁にして花初めて発く」とあるのを踏まえ、故意に花の盛りの場面設定を退け盛りの過ぎた落花の場面を取り入れている。それは、道真が白詩を意識して、それとは別の趣向を凝らした(和風の詩の世界の移行を思わせる)表現の一端として見る事も出来ようが、この詩が題画詩であるという詠作事情を考えた場合、この屏風画そのものが、唐絵とみるより落花春深い庭が展開しそこに管弦の一团が思い思いに座をしめて演奏している情景を描いた、より和臭味を帯びた大和絵のようなものではなかつたのかと考える方が自然のように思える(注⑬)

第三句目で「小兒相勸む分頭の舞」の部分だが、問題になるのは「分頭の舞」の解釈である。川口氏は

「分頭舞」はいまだ索出しえない。「分頭」は元稹の詩に「一程_{いづく}那_{いづく}ぞ忍ばん便ら分頭することを」などとあつて別離

の意であるが、ここは二班にでもわかれて小児が舞いをする
 一獅子舞でもするのであろうか。

と述べておられる。(注⑭)

管見によれば、「分頭舞」は、捜し得ない。そこで、「分頭」と「舞」を個別に考えてみる。まず「分頭」は大漢和辞典によれば、

①分ける。別離。〔吳融、湖州晚望詩〕兩條溪水分頭碧、四面人家入骨涼〔元稹、別李十一詩〕萬里尚能來遠道、一程那忍便分頭とある。

ここで再び白詩に戻ると第六句目に「慢拽歌詞唱渭城」がある。

この「渭城」は王維の「送元二使安西詩」

渭城朝雨浥輕塵 客舍青青柳色新
 勦君更盡一杯酒 西出陽關無故人

を指す事言うまでもない事だが、この詩は既に吉川幸次郎氏の指摘(注⑮)にもあるように、唐代に於いては、別離の餞別として必ず歌うのを常としたという、いわば当時においては誰もが口にする歌謡曲のようなものであったと言う。

故に白詩のこの句は、有名な王維の別離の詩を管弦に合わせて家の者皆で大合唱をした事を言っているのである。

道真が、「小兒相勸む分頭の舞ひを」としたのは、この白詩の「慢拽歌詞唱渭城」を踏まえ、それをこの屏風絵に合うよう

小児の歌舞の描写に変えたのではあるまいか。

つまり白詩の「別離」を象徴する「渭城を唱ふ」の語句を「別離」と同義語である「分頭」におきかえ、それを舞の上に付加した句作りではないかと思われる。とすれば、白詩の「別離の歌を唱う」から「別離の舞を踊る」というように、巧妙に転化させた道真の技巧が明らかになってくると思う。

三句目の中で「分頭」という語が一見浮いたように見えるのであるが、白詩と照合した場合前述のような解釈が可能だとすれば、この句の内容が明確になるはずである。

故に、この屏風絵には小児が歌舞を演じている描写があればそれで十分なわけで、その小児の舞の種別として「分頭」というものを捉えられる川口氏の説には従い難い。

第四句目「楽を取りて地上の仙となるべし」では、前句と同様、白詩の七、八句「不飲一杯聽一曲、将何安慰老心情」を踏まえているのは間違いない。

この句は「この老境に到ってからというものは酒と管弦、それらこそが慰めになるものだ。これらがなければ、この老いた毎日をどうして過ごせようか」という白楽天の心境が述べられている。

道真が、白詩のこの心情を十分踏まえつつしかも、「地上の仙となるべし」と言った白詩には見られない音楽との関わりを示す新たな句作りに転化させているのは注目すべきである。

これは、この詩が五十歳という長寿を迎えた基経に対する贈

答の詩であるという事、つまり、道真がいかに、太政大臣基経を意識し、国政の最高権力者たる人物の心情を考慮しての句作りであつたかを示す証になると思う。

三

以上、『白氏文集』と道真の詩の影響関係さらには道真の攝取態度、創作姿勢などを探る事をめざし論述して来たのだが、対象とした作品がわずかであり、これらから結論を急ぐのは無理があるが、それでも手掛りらしきものは見出せたと思う。

両詩の関わりを大きく狭義的・広義的影響と分け比較検討して来たわけだが、結果的に「狭義的影響」とは『白氏文集』を一種の「辞典」「類書」的観念で撰取を試みている姿勢と換言できると思う。

一方、道真の場合、そのような影響の撰取に留まらず、さらに深意の「広義的影響」を受けた創作も存在している事を以上の二作品を挙げて論証して来た。

この二作品から、道真が白楽天の詩意を如何に正確にしかも深く汲み取り自分の創作のベースにしていたか認識できたと思う。

注①『平安時代文学と白氏文集―句題和歌、千載佳句研究篇―』

金子彦二郎

「菅原道真と白氏文集」(『東洋大学紀要12昭33、2』)

金子彦二郎

道真の詩に投影された『白氏文集』

『平安時代文学と白氏文集―道真の文学研究篇第二冊―』

金子彦二郎

注②『平安時代文学と白氏文集―句題和歌、千載佳句研究篇―』

金子彦二郎

注③「寒早十首」と他の詩人の作品との形態の類似を指摘されたものとして川口氏の「五律の連作の体式は元稹の『生春二十首』ならびに文集の『春の深きに和す二十首』の体式に模する。劉禹錫にも『深春好』があり白居易と共に、元稹の作に應じて作った」(岩波古典大系『菅家文章後集』六八三頁)との論述があり、又金子氏は

「すなはち道真は十首、元稹は二十首であるが、其の毎詩に韻字として『人、身、貧、類』の四字を使用せるあたりも、元稹の毎詩に『中、風、融、叢』の四字を使用した五言詩と全く其の体裁を同じくしてゐる事に徴しても明かである。」として元稹の「生春二十首」との類似を指摘されている。

(『平安時代文学と白氏文集』九〇頁―道真の文学研究篇第二冊―)

注④「愛惡随人情」の解釈をめぐって―

〔説一〕「愛惡は人情に随ふことを」

この訓読で行けば白楽天の主観といったものは抑えられ読者自身への投げ掛けで終っている。「花を愛したり嫌うような事は人間の心情でいずれかに決められてしまうものだ」の意になるうか。

〔説二〕「愛すること人情に随ふことを悪む」この訓読だと人々が牡丹というものを蔑ろにして玉葉花へ走ってしまったている事に対する白楽天の憤り。これは単に花に限った事だけではなく人事に於いてもしかりと、さらに推し進めれば、本当に有能な者が見捨られ、そうでないものが採用されている現状に対する間接的な批判を含んでいる。

「すばらしい花だと覚するのは実は身勝手な人の心情からくるもので、そういった主観的なもので、牡丹の美しさも退けられている。私はこのような事をはなはだ不満に思う」の意か。

注⑤ 岩波古典文学大系『菅家文章、後集』作品番号二五七

補注三参照

注⑥ 岩波古典文学大系『菅家文章、後集』解説、菅原道真年表

参照

注⑦ 『菅原道真』 坂本太郎

「菅原道真の前半生」とくに讃岐守時代を中心にして」

（「日本人物大系」第一巻昭三六） 弥永貞三

注⑧ 「菅原道真論の断章」（「国語と国文学」昭三二、一〇）

秋山 虔

注⑨ 「菅原道真の前半生」とくに讃岐守時代を中心にして」

弥永貞三

注⑩ 右同。

注⑪ 岩波古典文学大系『菅家文章、後集』二四〇頁

補注一参照

注⑫ 右同書。作品番号一七七 補注一

注⑬ 川口氏は補注で「これは文集の世界ならば、唐絵に題したことになるが、傀儡あたりがたまたま歌舞したところを写したとすれば大和絵の世俗画の画面ともみられなくはない」との指摘がある。

（前掲書 作品番号一七七 補三 六八〇頁）

注⑭ 岩波古典文学大系『菅家文章、後集』作品番号一七七 頭注

注⑮ 『新唐詩選』 吉川幸次郎、三好達治著

一三六頁～一三九頁

△付記▽

稿を草するにあたり、西岡晴彦先生より多大の御教示を得ました。また論述の進め方につき、金原理先生にいろいろと御指導頂きました。深謝申し上げます。

◆ 寄贈 図書

- ・ 『洞門抄物と国語研究』 『人天眼目抄』 福山恵理子氏より
- ・ 『大字典』 『くずし解読字典』 『かな解読字典』
- ・ 『日本古典文学大系』 10・19・52年度国文卒業生より
- ・ 『国語国文学資料集』 1 幸若舞曲集(一) 2 幸若舞曲集(二)
- ・ 3 影印田植草紙集 広島女子大国語国文学研より
- ・ 『図説日本の古典』 15 井原西鶴 長谷川強氏より